

春季全国火災予防運動

「火の用心 ことばを形に 習慣に」をスローガンに、3月1日(木)から7日(水)まで、春季全国火災予防運動が実施されます。

この運動は、火災の発生しやすい時季を迎え、皆さんに防火を心掛けてもらい、尊い生命や財産を奪う火災を防ぐことを目的に展開しています。

●春先は火災が起きやすいシーズンです！

春は、冬に比べると、全国的に空気が乾燥しやすくなります。強い南風が吹く季節でもあり、ひとたび火災が発生すると被害が大きくなりやすいので注意が必要です。

また、暖かくなると“身近にある意外なもの”が火災の原因になることがあります。それは、キッチンに出没したゴキブリなどに使う殺虫剤です。殺虫剤に使われている可燃性ガスにストーブの火が引火することがあるので、周りをよく確認してから使うようにしましょう。



火の用心 ことばを形に
習慣に
平成29年度全国統一防火標語

●問い合わせ

ひたちなか・東海広域事務組合
消防本部予防課(☎271-0735)

この10年間で見ると、前半にはトンボの種類数は40には届きませんでした。新川ではギンヤンマ・コフキトンボ・モノサシトンボ・ハグロトンボ・オニヤンマが飛び回り、押延のため池のウチワヤンマ・コサナエ・ヒガシカワ



ショウジョウトンボの羽ばたき

今回の調査報告書では、村のトンボは40種、チョウ類は50種、バツタ類は80種以上となり、新参者として、セミ科クマゼミ、ゴキブリ類オオゴキブリ、トンボ科トラフトンボ、チョウ類アカボシゴマダラなどの名を挙げました。阿漕ヶ浦などのトンボ類調査を継続していけば、全村的に、水環境の推移ばかりではなく、湿地の植生の変遷の要因も推測できることでしょう。

豊かな村の自然に生息し、人々の社会と共生するかのよう姿を見せる動物の一群、昆虫のトンボ類を調査の対象として阿漕ヶ浦で観察を始めた昭和50(1975)年から、40年以上が経ちました。その間、平成6(1994)年、村教育委員会発行の『東海村の自然』にトンボ目10科51種の名を並べ、13年後の平成19(2007)年、続刊の『東海村の自然誌』でも、その数は増減しませんでした。それから10年間、須和間在住の須田秋夫さん(東海村の文化財と自然を守る会)会長の協力もあり、本格的に調べ上げた成果を今春発行予定の『東海村の自然誌II』で報告できるようになりましたが、村内全域で、トンボの数が急激に減少してしまった現状に危機感を覚えています。

トンボは活発に飛び、やぶの中ではムカシヤンマの羽化が見られ、耕作放棄水田のあぜでは、オゼイトトンボ・チョウトンボ・アオヤンマが見られました。そして、平成5(1993)年7月に村松小学校下の細流の岸で見たハツチョウトンボ(日本一小さなトンボとして知られる。雄の体は初め橙黄色であるが、成熟すると鮮やかな赤色に変わる)の再発見を期待し、徹底的に探したのですが、神楽沢・総合福祉センター「絆」北側・阿漕ヶ浦照沼と、ヨシ群落で覆われてしまっような湿地に踏み込んだものの、体長2センチメートルほどの小さな赤トンボ探しは不成就に終わりました。

トンボの数が減つていると言われる昨今、「赤蜻蛉」と呼ばれるアカネ類の発生数の減少は県内外、各地で憂慮されています。

ふるさと歴訪



自然を探して

トンボの眼は何を見たのか

東海村自然調査団団長

廣瀬 誠